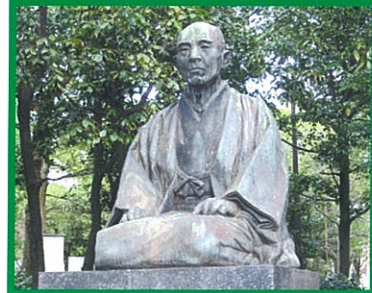


しつき うつ もと かがわ しつげい ちち
 (1)「漆器の美しさを求めて」香川の漆芸の父

かがわしつき
 香川漆器はどのようにしておこったのでしょうか

この漆器は、どのようにして作ったのであろうか。
 暑くてしめり気の多い気候の中でも、形が変わらず、
 漆もはげないひみつは、やっぱり、内側にあったんだ。
 これで、いつまでも美しく、じょうぶで、形の変
 わらない漆器が作れるぞ！

たま かし ぞうごく
 玉楮 象谷 (1806～1869)



ちゅうおうこうえん (たかまつし) ぞうごくぞう
 中央公園 (高松市) にある象谷像

はじめに

香川漆器は、今からおよそ170年あまり前に、玉楮象谷という人が、すぐれた漆器を作ったことに始まります。

象谷は、中国の唐物漆器や中国の南方(四川雲南地方)・東南アジア(タイ・ミャンマーなど)から伝来した籃胎蒟醬漆器を研究し、これまでの伝統的な技法を基礎にして独特の漆芸三技法(蒟醬・存清・彫漆)を確立しました。

1642(寛永19)年、水戸徳川家から、松平頼重が高松のお殿様になって来られました。その後の歴代藩主は、文化芸術に力を入れてきました。茶道、華道、俳諧などが生まれ、工芸(保多織、桐下駄、円座、提灯、盆栽、張子、獅子頭など)も盛んになりました。漆芸もその一つで、塗鞘や茶器などが職人によって作られていました。

その後、香川県の代表的な伝統産業に発展できたのは、江戸末期に登場した玉楮象谷さんの功績によるものです。

玉楮象谷は、京都で東本願寺や大徳寺などが秘蔵するたくさんの漆芸作品に接しました。特に、室町時代に日本に伝わって来た唐物漆器や籃胎蒟醬漆器に、大きく影響を受けました。

籃胎とは、竹で編んだ籠に、漆を塗ったもの。東南アジアなど雨期と乾期のある地域では、湿度の変化に耐えられるものとして作られていました。竹は、物差しに使われるくらいだから、温度差によるゆがみが少ないです。だから、利用することが、効果をもたらすのです。



象谷のみごとな作品

下地に布をはったり、細かいもようを工夫したりして、日本で初めて蒔醬を作ることができました。特に、料紙箱と硯箱は有名で、国の重要美術品となっています。料紙とは、物を書くのに使う紙のことです。料紙箱と硯箱で一そろいです。この作品は、竹ひごをかご状に編んで容器を作ってから仕上げたものです。



料紙箱と硯箱
玉楯 象谷 作 (香川県文化会館蔵)



堆朱皺箱
玉楯 象谷 作 (高松松平家資料)

また、殿様に頼まれて、つづみを入れる箱を作った時にも、もようをほるための剣を自分で考えて作り、研石もよく研げるものを探し求めて使い、上に葵の紋(松平家の紋)をほり、その周りと横に、ぼたんやきくの花、それから蝶をうきぼりにしてあります。これは、厚く塗り重ねた漆をほった作品としては、たいへんすばらしいもので、殿様にさしあげると、とても喜ばれたということです。

このほかにも、象谷の作品には、りっぱなものがたくさんあります。重要美術品になっている「一角印籠」は、漆の作品ではありませんが、高さ8.6cm、はば5.5cm、厚さ2.9cmの小さな印ろう(薬の入れ物)の表面に、花30個、かめ343匹、かに443匹など1,086点の動植物がほりこまれたものです。それぞれは、今にも動き出しそうなほど生き生きとしていて、見る人々を感心させました。この作品は、象谷がどんなにすぐれたうでを持つ名工であったかを物語っているとされています。



一角印籠
玉楯 象谷 作 (香川県文化会館蔵)



たま かじ そら こく ねん びょう 玉 椿 象 谷 さ ん の ミ ニ 年 表		
せい れき 西 暦	ねん れい 年齢	できごと
1806年	0	現在の高松市磨屋町に生まれる。父のもとで、修行を積む。
1830年	24	高松藩に初めてお盆を納める。
1835年	29	様々な作品をつくり、お殿様に納める。お殿様より、帯刀を許される。
1836年	30	藩の宝物の整理と修理を頼まれる。
1839年	33	「一角印籠」を、お殿様に納める。
1854年	49	「料紙箱と硯箱」を、お殿様に納める。
1869年	63	亡くなる。

わざ ひとびと で あい 技と人々との出会い

象谷の父理右衛門は、刀のさやに漆を塗ったり、文字を彫ったりする仕事をしていました。幼い頃から、父の仕事を習ったり、彫刻をして遊んだりする中で、いろいろな技術を身に付けていきました。

20歳を過ぎたころ象谷は、京都に行きました。京都東本願寺の雲華和尚の紹介で、古くからあるお寺や神社が大切にしているすぐれた美術品を見せてもらって、熱心に研究することができました。その中には、それまで見たこともない外国からわたってきた品々もふくまれていました。同時に、画家や書家などのすぐれた人々との出会いが象谷に大きな影響を与えました。

あた わざ お もと こころ 新しい技を追い求める心

高松に帰ってきた象谷は、仕事台の上に、殿様の蔵からお借りした中国の漆器を置いて、うでを組み、じっと見つめながら考えていました。

(これは、どうやって作ったのだろう。このような漆器を作ったら、きっと殿様をはじめ、多くの人々に喜ばれるにちがいない。)

象谷は、これらの漆器をお手本にして、自分の手で、もっとすばらしい、いいものを作ろうと決心しました。そこで、これらの漆器の作り方をていねいに調べはじめました。しかし、どうしたら、いつまでも美しく、じょうぶで、形の変わらない漆器が作れるのでしょうか。さすがの象谷も、とほうにくれてしまいました。

31歳の時、高松藩の宝物を整理したり修理したりする役を命ぜられました。

ある日、いつものように、漆器の修理をしていた象谷は、漆器をじっと見つめていましたが、やがて、心を決めたように、小刀で漆器を切り始めました。

「あっ、何をなさるのですか、大切なものを。おやめなさい。」

周りの人が気づいて、あわてて止めましたが、象谷は返事もしないで、とうとう切ってしまいました。そして、その切り口をさすったり、虫めがねでよく観察したり、それまでの自分の作品と比べ合わせたりして、くわしく調べました。

すると、その漆器は、木枠の中に竹を編んで
はりつけて、漆で固めた型を作り、最後に黒い
漆を塗ってから、剣（彫刻刀）でもようをほって、
その中に色の漆をうめてみがき出していること
が分かりました。

（ううむ、なるほど。暑くてしめり気の多い
気候の中でも、形が変わらず、漆もはげないひ
みつは、やっぱり内側にあったんだ。）

象谷は、目の前がぱっと明るくなったように感じて、胸がわくわくしました。

また、ある時、京都で1枚のお盆を見せてもらったときのことです。象谷はしばらくそれをじっくりと手にとって見たが、そのすばらしさに心をうばわれ、同じものを作りたいと強く思いました。そして、高松へ帰ってから、5年間研究を重ね、作品を作りました。

「ようやく完成した。よく似ているが、本物とはどこか違う。はずかしい。」
象谷の新しい技術を身につけようとする心は強まるばかりでした。



現代に受け継がれる象谷の心と技

象谷は、中国などで発達した彫漆、存清、蒟醬の3技法を、日本的な漆工技法として香川県（高松）の地によみがえらせました。これは、全国的に見てもめずらしいことです。当時、漆といえば「蒔絵」が中心でしたが、象谷は、この3技法なら、自由な発想ができ、全く新しい作品を生み出せると確信したのかもしれない。

香川県には、漆器の素地となる良質の木材が豊富にとれるわけでもなく、漆を産出したとの記録もありません。さらに、乾燥を嫌い、湿気を好む漆は、雨が少なく、晴天の日が多い香川県の気候に、とりわけ適しているとは言えません。

このような中で、象谷の心と技を受け継ごうと技をみがいた人々によって、香川県は、全国でも有数の漆器の産地になっていきました。



象谷は、刀を身につけてもよいことをゆるされたり、殿様から「玉椿」の姓をいただいたりしました。当時、こうしたことは、たいへん名誉なことでした。それだけ象谷の技術は、すぐれたものだったのです。